

報道関係者 各位

2017年9月26日

ペルー、パコパンパ遺跡で最古級の儀礼的暴力の証拠を発見**※ 報道解禁日 2017年9月29日午前3時（日本時間）****●要旨**

ペルー北部のアンデス山地に築かれたパコパンパ遺跡から出土した、紀元前1200年から500年前の複数の人骨に、頭部、顔面の陥没骨折を含む激しい暴力行為の痕跡を発見した。骨折はすべて治癒しており、神殿における儀礼行為の一部に暴力が用いられたことが推定される。本発見は、儀礼的暴力の痕跡としては古代アンデスにおいて最古の事例である。

掲載誌米科学誌 PLOS ONE

論文題目 Pacopampa: Early evidence of violence at a ceremonial site in the northern Peruvian highlands (和訳 パコパンパ: ペルー北高地の祭祀センターにおける初期の暴力の証拠)

著者長岡朋人¹, 鶴澤和宏², 関雄二³, ダニエル・モラーレス・チョコカノ⁴Tomohito Nagaoka¹, Kazuhiro Uzawa², Yuji Seki³, Daniel Morales Chocano⁴

¹ 聖マリヤナ医科大学解剖学講座, ² 東亜大学人間科学部, ³ 国立民族学博物館, ⁴ ペルー国立サン・マルコス大学

●研究概要

南米・アンデスは古代文明発祥の地のひとつである。とくに形成期(紀元前3000~50年)とよぶ時期には、神殿が築かれ、遠方との交易を含む複雑な社会への発展が見られた。形成期社会は農耕による余剰生産をとまわず、神殿における儀礼・祭祀によって社会統合がなされたと考えられる。したがって、神殿でどのような行為が行われていたのかを解明することが、形成期社会を理解する上で重要である。

日本とペルーの研究者からなる国際調査団は、ペルー北高地に築かれた神殿、パコパンパ遺跡の発掘調査をおこない、大量の人骨を検出した。このなかには、頭部、顔面に激しい打撃を受けて、骨折し、その後治癒した痕跡を残す人骨が複数含まれていた。これら人骨の詳細な分析を実施し、以下の知見を得た。

●資料と方法

パコパンパ遺跡から出土した、形成期中期(紀元前1200~800年)から後期(紀元前800~500年)の104体の人骨(未成人38体, 成人66体)を調査。外傷の種類, 頻度, 好発部位, 治癒痕の有無を記載し, 死亡年齢, 性別, 社会階層, 時代による違いを調べた。出土人骨の年代は考古遺物や遺構, 人骨の放射性炭素年代で決定した。

●研究結果

パコパンパ遺跡から出土した人骨に見られる外傷は以下のようにまとめられる。

- (1) 外傷の頻度と種類 104体の人骨の中で7体の人骨に頭蓋冠の陥没骨折(3体)や顔面骨折(1体), 下肢骨の骨折(2体), 肘関節の脱臼(1体)を認めた(6.7%)。すべての骨折・脱臼には治癒反応を認めた。頭蓋冠や顔面の骨折2体は何度も繰り返し打撃を受けた痕跡が残っていた。
- (2) 年齢・性別 外傷は未成人には見られなかった一方, 成人では男女ともに認められた。
- (3) 時期 外傷は形成期中期と後期の両時期に認められた。特に陥没骨折は両時期に認められたが時代とともに重症化する傾向があった。

- (4) 社会階層 外傷を持つ人骨には最高位の人骨を含まないと考えられる。それは金属製品を伴う貴人墓から出土した人骨には外傷を認めなかったためである。ただし、巨大な神殿に埋葬された人物がいまだに百数体しか出土していないことから考えると、被葬者は選ばれた人々であった可能性は否定できない。
- (5) 要因 外傷がすべて治癒しているという点、頭蓋に何度も繰り返し打撃を受けている点から、本症例はコントロールされた条件下で行われた暴力と推定できる。また、儀礼空間から人骨が出土していること、遺跡は防御施設を欠くこと、男女共通して外傷が認められることなどから、暴力は組織的な戦闘や襲撃ではなく、儀礼と結びついたものと想定できる。

●研究の意義

余剰農業生産物を政治的にコントロールせずに神殿建築物や社会の階層化が起きた時代にすでに儀礼的な暴力行為が存在し、当時の社会がより複雑であることを示すことができた。これまで儀礼的暴力については、今回扱った資料よりも古い時代の遺跡において、遊離した頭骨の出土や、身体の切断、儀礼的放血を表した石彫の図像を根拠に、その存在が論じられてきたものの、科学的分析による検証は全く行われてこなかった。また本発見とほぼ同時代の遺跡においても、自然人類学的分析は、日本調査団がかつて調査を実施したクントウル・ワシ遺跡における一例での報告が唯一であり、しかも一例であるがゆえに、繰り返し行われた行為であるかを確定することができなかった。その点で、アンデス考古学史上、初めてパターン化された暴力の証拠を科学的につかんだといえる。

また本発見の時代よりも 1000 年ほど下るが、北海岸で成立したモチェ王国において、天候不順などの際に、支配者層に属するエリート戦士の間で儀礼的闘争が行われ、敗者が捕虜となり、人身供犠に供せられたことが報告されている。パコパンバ遺跡の時代、それほどの洗練された儀礼体系を有していたかどうかについては定かではないが、アンデス文明において、かなり古い時代から暴力が儀礼の中に組み込まれていたことが今回証明されたといえる。

すなわち、暴力的証拠は、単に過去の人間が好戦的であるとか、他の集団を戦闘行為によって従属させていくというような単純な解釈では説明できない人間の社会的行為の複雑さを示すものであり、こうした証拠を積み重ねることで人類の進化や文明の形成過程を明らかにしていくことができると考えられる。

●研究助成

本研究は下記の科学研究費補助金の助成により行われた。

基盤研究(B)「生物考古学資料にもとづく古代アンデス社会の複雑化過程の解明」16H05639

基盤研究(A)「アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築」16H02729

基盤研究(S)「権力の生成と変容から見たアンデス文明史の再構築」23222003

問い合わせ

責任著者

長岡朋人 聖マリアンナ医科大学解剖学講座 E-mail: nagaoka@marianna-u.ac.jp TEL:044-977-8111

プロジェクトリーダー

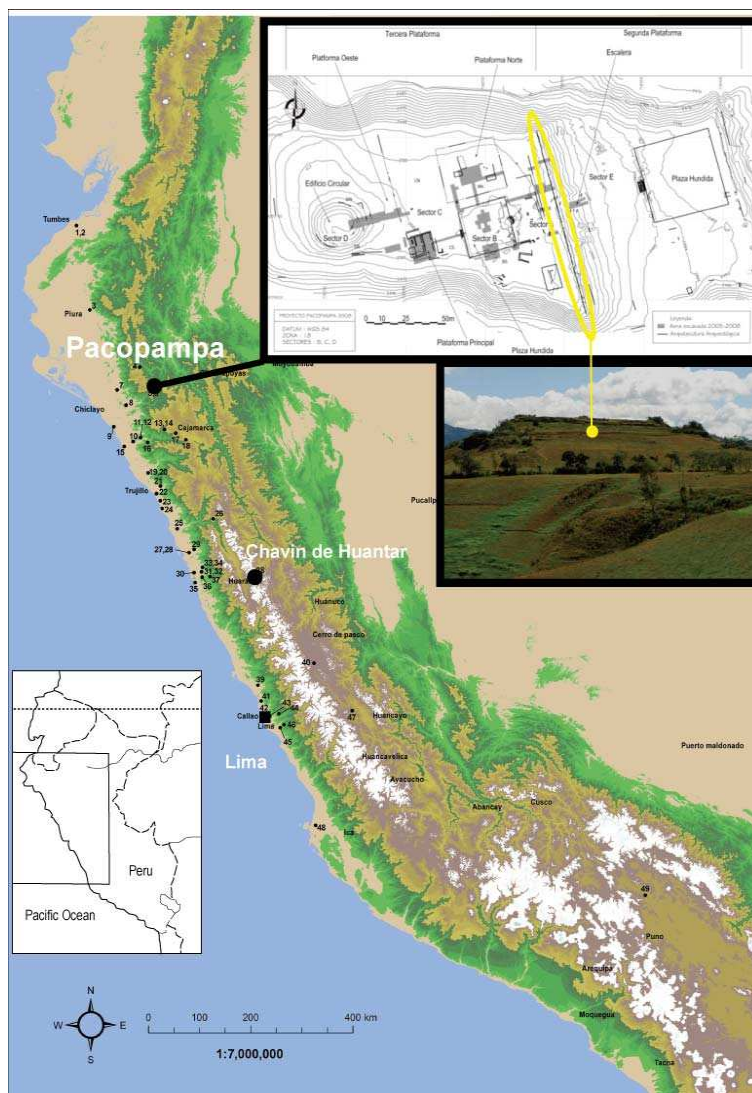
鶴澤和宏 東亜大学人間科学部 E-mail: kuzawa@toua-u.ac.jp Tel:090-8806-8256

調査団代表

関 雄二 国立民族学博物館 E-mail: sekito@idc.minpaku.ac.jp Tel:06-6878-8252, 080-6126-5533



頭蓋骨の陥没骨折の例。治癒していることからこの個体が暴力を受けながら存命していたことを示す。



遺跡はペルー北部高地標高 2410m に位置する。

[プレスリリースお問い合わせ] 国立民族学博物館 総務課 広報係
 電話:06-6878-8560(直通) Fax:06-6875-0401 Mail:koho@idc.minpaku.ac.jp
 プレス向けウェブサイト www.minpaku.ac.jp/press